# 二人の留学生とグリフィス（二）

杉原丈夫

## 若き日のグリフィス

福井在住中におけるグリフィスの行動は、一般によく知られているけれども、彼が福井行きを決意するまでの事情や、日本から帰国後の生活については、あまり伝えられていないようである。本章ではその二点に関して二人の留学生に係わりのある範囲でやや詳しく述べることにする。

グリフィス(William Elliot Griffis)は、一八四三年九月アメリカのフィラデルフィアで生まれた。彼の父は石炭商人であったが、一八五五年前後から商売がふるわず、経済的に窮してきた。だがその苦しい家計の中でグリフィスの学業だけは続けさせてくれたので、彼は一八五九年（十六歳）高等学校を卒業できた。しかし大学へ進学するだけの余裕はなく、彼は宝石会社に就職して働いた。

グリフィスは信仰深い青年であって、はじめはプレズビテアン派の教会に属していたが、やがてそこを離れて一八六三年、二十歳のときオランダ改革教会に加わった。

そしてこの年の五月二十四日グリフィスは、彼の一生を方向付ける呼び声を聞いた。この日教会でラトガーズ・カレジの学長ヘンリイ・カンブル（既述）の説教があり、その説教において学長は「聖職に付け、ラトガーズ・カレジに入学して勉強せよ、そしていつかは日本へ行け」とグリフィスに訴えたかのように彼には思われ、彼は強く感動した。

こうしてグリフィスの生涯の方針はきまった。ところが当時は南北戦争のさなかであって、その年の六月彼は軍に招集された。しかし幸運なことには、戦況は北軍に有利に進展して、彼は早くも八月に除隊になった。

そこで彼は、改革教会の新聞の編集者になり、かたわら家庭教師をして働きながら、カレジ入学のための試験勉強を始めた。当時の試験科目は、ギリシア語・ラテン語・数学・地理学の四科目であった。そして一八六五年の春彼は入試に合格して、一八六九年クラスの一員となった。既述のように、アメリカでは卒業予定年次をもってクラス名とするのである。

ラトガーズ・カレジは、神学と古典学とを主たる科目としている学校であったが、前に述べたように、一八六四年に新たにラトガーズ科学学校を設けた。グリフィスはもともと聖職者になるためにカレジ入学を志願したにもかかわらず、彼は、神学コースではなく、新しい科学コースを選んだ。これが後日彼を福井に招く遠因の一つになった。

しかし科学学校といっても、今日の大学の理学部とは異なり、グリフィスは数学・天文学・化学・物理学・植物学・ラテン語・ギリシア語・ドイツ語・フランス語・ヘブライ語・歴史などいろいろな科目を修めていて、むし

ろ旧高等学校の理科に近い感じである。

一八六九年彼はカレジを卒業した。姉といっしょにしばらくヨーロッパ旅行をして後、再びニューブランジック市に戻り、ラトガーズ神学校に入学するとともに、ラトガーズ・グラマ・スクールにも復職した。

復職というのは、彼はカレジの学生であったときも、アルバイトとしてグラマ・スクールでギリシア語やラテン語を教えていたからである。しかし今度は古典語ではなく、英語と自然科学などを教えることになった。

その一方彼は近くのいくつかの小さい町で宗教的な講義や説教をしていた。これらの状況から推測するに、このころグリフィスは自分の人生の進路についての二つの方向、すなわち神学校を卒業して聖職に従事するか、グラマ・スクールで教師を続けるか、迷っていたように思われる。

**日本からの招き**

日本からの招きがグリフィスのもとに届いたのは、翌一八七〇年（明治三年）九月初めで、彼が二十八歳のときである。この年の夏福井藩は長崎のフルベキ（既述）に科学の先生を紹介してくれるように求めた。

フルベキはこの申し出を、ニューヨークにある改革教会の国外伝道部の責任者フェリス（既述）に知らせた。フェリスはそれをラトガーズ・カレジの友人に話し、それがさらに次々と伝えられて、最後にラトガーズ・グラマ・スクールの校長であるライリイ(D.T. Reilley)のところへ届いた。

フルベキがフェリスに送った手紙には、福井藩が求めているのは化学と物理学との教師で、年俸は二、四〇〇ドル、それに家と馬が貸与されるとあり、さらに、日本では男一人年八〇〇ドルで暮らせると書き加えてあった。校長ライリイはそれをグリフィスに伝えた。

校長はなぜグリフィスを候補者に選んだのであろうか。もちろんグリフィスは科学コースを修めており、信仰も厚いから、推薦にふさわしい人物である。しかしそのほかにもう一つ理由があった。

グリフィスには扶養すべき父親と弟妹があったので、彼がグラマ・スクールで得ている給料だけでは充分でなかった。彼はそのことを校長に訴えていた。だから校長は彼に「日本で三か年勤めておれば、六、〇〇〇ドルを持って帰れるだろう」といって日本行きを勧めたのである。

グリフィスは、この勧めに大いに心を動かされた。しかしそれに応ずるには重大な障害があった。それは彼にはエリン・ジョンスン(Ellen Johnson)という恋人があり、結婚の約束までしていた。考えた末彼は日本行きを断念して、彼女への愛を選んだ。

ところがこの決定に対し、日本の留学生やグリフィスの友人たちが、すぐグリフィスのところへ押しかけて来て、考え直すように説いた。それで彼は九月中旬のある日彼女と会って話し合った。

両人の会談の内容がどのようなものであったかは不明であるが、結論としては「二人の間には夫と妻になる見込みはない」ことが明らかになり、グリフィスは日本行きを決意した。カレジの学長をはじめ大部分の教授たちは彼の日本行きを激励した。

次に日本滞在中のことは省略して、アメリカへ帰国した後の彼の動向について簡単に述

べておく。グリフィスは一八七四年（明治七年）七月故郷フィラデルフィアに帰り、九月ごろニューヨークに出て「皇国」（ミカドズ・エンパイア）の執筆に専念した。「皇国」は翌一八七五年十月に出版された。

「皇国」の執筆を終えるや、彼は本来の念願である聖職者になるため、この年の秋ユニオン神学校に入学、二年後の一八七七年五月同校を卒業して、改革教会の牧師となった。以後彼は聖職者としての勤めのかたわら、日本研究者として活動した。

**今立吐酔の略歴**

今立吐酔は、自筆の履歴書に従えば、一八五六年（安政三年）三月三日越前に生まれた。父は今立乗永、母は西野レウである。自筆の履歴書には書いてないが、彼の家は鯖江市松成町満願寺（真宗本願寺）で、彼はそこの五男であった。福井藩には藩校明道館があったが、維新後一八六九年（明治二年）十二月に校名を明新館と改め、課程も近代的に改編して、外塾・小学校・中学校・医学校の四課程を設けた。だがこの明新館も旧明道館と同様に、藩の武士の子弟だけの学校であって、一般人の子弟は入学を許されなかった。わずかに初級学校である外塾についてのみ「社寺農商ノ者ト雖モ入塾相願候ヘハ吟味ノ上差許候事」と学校規条に定めてあった。

ところが時世の進展にともない、一八七一年（明治四年）二月に学校規条をさらに改正して、規条の冒頭に「今般校制従前ノ体裁ヲ変メ四民一途人材教育ノ制度ニ革メ条」とうたいあげている。すなわちこの年初めて社寺農商の子弟にも明新館入学の道が開かれた。そしてグリフィスが明新館に着任したのは、まさにこの規条改正の一か月後明治四年三月であった。

さらにまた、今立吐酔が明新館の中学校課程に入学したのも、同じくこの年明治四年の春、十五歳のときである。グリフィスの四月十一日の日記には「六人の仏僧が明日からわたしのクラスに入る」と書いてある。この六人の僧のうち一人が吐酔であったろう。吐酔は美少年であり、聡明であったので、グリフィスのお気に入りとなり、明治四年九月外人教師用の新しい洋館が落成したとき、吐酔はグリフィスのその新宅に同居させてもらう程であった。同居人は他に、実験助手の青年が二人、なんらかの縁故がある少年が三人あった。

一八七二年（明治五年）一月グリフィスは福井を去って上京した。その後吐酔がどうしていたかは不明であるが、翌明治六年四月には彼も上京して開成学校に入学している。

開成学校は後に東京大学に発展する前身校の一つである。政府は明治六年四月に東京の第一番中学を昇格して開成学校と改名した。中学校より程度の高い専門学校とするためである。

ついでながら付言すれば、東京の大学南校の外人教師の教頭は、かのフルベキ（既述）である。彼は福井の明新館からグリフィスを引き抜いて南校の教師に任じた。その大学南校が明治五年八月に第一番中学と改称され、さらに翌年開成学校に改編されたので、グリフィスは南校から引き続き第一番中学を経て開成学校の教師になっていた。

開成学校は、法学・理学・工業学の三学科と、諸芸学・鉱山学の附随的な二学科とより

なっていた。五学科とも本科と予科とがあった。本科は専門学校程度の授業を行ない、予科は本科へ入るだけの学力がない学生のための予備校であった。開校当初には本科入学生は鉱山学科にあっただけで、他の四学科は皆予科生だけであった。

予科は最下級の第六級から最上級の第一級まであり、半年に一級ずつ昇級する。工業学科以外の学科では開校当初から予科の上級に入学する者がいたが、工業学科だけは新設学科であって、入学者五二名の全員が第六級であった。

今立吐酔は、法学を第一志望としたが、それは認められず、工業学予科第六級に入学を許可された。十七歳の春のことである。

開成学校は明治十年に東京大学に改編昇格するのであるから、吐酔がそのまま開成学校に在学していたならば、東京大学の第一回入学生となり、エリート・コースを進んでいたであろうに、彼は自らの運命を転ずるような選択を、入学の翌年行った。

一八七四年（明治七年）七月グリフィスはアメリカに帰国した。それを機会に吐酔もアメリカへ留学することになった。この留学はグリフィスがすすめたのか、吐酔の方から頼んだのか明らかではない。ただ二人の間に留学の学費について契約が結ばれていて、これが後日のトラブルの原因になっている。いずれにせよ、吐酔はグリフィスより三か月以上も遅れてアメリカに着いている。

グリフィスの家はペンシルバニア州のフィラデルフィアにあったが、そこには彼の父と姉妹や弟を住まわせ、自分はニューヨークに出て居を構え、著作に専念していた。吐酔はフィラデルフィアの方の家でやっかいになっていた。

吐酔は翌一八七五年（明治八年）九月にフィラデルフィアにあるペンシルバニア大学のタウン（Towne）科学学校に入学し、四年後の一八七九年（明治十二年）卒業して、理学士の称号を得ている。化学専攻であったという。

卒業後彼はただちに日本に帰り、その年すなわち明治十二年十月に「京都府中学」に教師として迎えられた。この中学は従来からあった仮中学三校を統合して、この年の四月に創立されたばかりの中学校であった。

彼は主として化学を担当していた。彼の授業は、語学練習の意味も兼ねて先生の説明も生徒の質問もすべて英語を用いる事になっていた。

一八八二年（明治十五年）五月彼は二十五歳の若さで京都府中学校の校長に任ぜられた。この学校では明治十二年の開校以来校長の職は空席になっていたから、吐酔が第一代の校長である。このような抜てきは、彼の人物と学力、それにアメリカ留学という経歴が高く評価されたからであろう。ついでながら彼の容貌も図のごとく実にりっぱである。

京都府中学は、明治十七年一月「京都府立京都中学校」と改称、さらに明治二十年一月に京都府下の三中学を併合して「京都府尋常中学校」となった。

当時の京都府当局は、大阪にある第三高等中学校（いわゆる三高）を京都に誘致し、京都府尋常中学校を第三高等中学校の予科に吸収しようと考えていた。

吐酔も、文部大臣森有礼をその官邸に訪ね

たりして、三高の京都誘致に尽力していた。そして、一八八七年（明治二十年）七月彼は、三高の京都移転が決定した段階で、京都府尋常中学校における彼の使命は終わったという理由により、校長を辞して、外務省へ出向した。秦任官四等の翻訳官であったという。

一八九七年（明治三十一年）九月に彼自身が書いた履歴書によれば、一八八七～八九年は外務省書記、一八八九～九三年は北京で公使館書記、一八九五年（明治二十八年）は日清戦争により遼東半島占領軍司令官のもとで文官として勤めた。

彼はこの履歴書の末尾で友人あてに「写真を同封した。君は法廷の制服を着用しているわたしの姿を見るだろう」と書き加えているから、明治三十一年当時彼は裁判関係の仕事をしていたのであろう。

しかしその後の彼の経歴については、正確なことは分からない。一書に彼が鹿児島造士館長・長崎高等商業学校長を勤めたと記しているが、彼がこの二校で校長または教授として在任した事実は全くない。

彼は一九三一年（昭和六年）五月東京板橋の娘婿松谷家で永眠した。七十五歳である。

**吐酔の留学上の問題点**

今立吐酔は、グリフィスというりっぱな先生の愛顧を受け、明治初期にアメリカ留学をするという幸運に恵まれ、帰国後は若くして府立中学校の校長に登用され、出世コースを順調にスタートしているにもかかわらず、なぜ突然初志を翻して、留学で修めた専門的知識を捨て去り、通常の役人生活に転じたのであろうか。そもそも彼の留学は、彼の人生にとってどのような意義があったのか、それが問題である。

吐酔の留学に関して問題点が三つある。その第一はやはり学費である。日下部太郎が官費留学であったのに対し、吐酔はグリフィスの私費による留学であるから、財源的には不安定であった。

一八七五年（明治八年）秋ペンシルバニア大学の入試合格発表の十数日前に、彼は故郷の父に九月四日付けで手紙を出し、グリフィスに対する不信と不満を述べている。それによれば、グリフィスは吐酔に学費援助の打ち切りを申し出た。その理由は、グリフィスには年老いた父とまだ自活できない弟妹三人がいて、この四人を扶養するために家計が苦しく、これ以上吐酔のめんどうは見てやれないというのである。

アメリカへ来るときの契約では、吐酔の学費をグリフィスが支給するが、それができなくなった場合は、吐酔を日本まで送り返すということになっていた。したがってグリフィス側からいえば、今そのときが来たのであるから、心外ではあるが、日本へ帰ってもらいたいというわけである。

しかしアメリカにとどまって勉学を続けたいのならば、方法がある。それはキリスト教に入信して、その布教に尽力することを誓うならば、教会関係者から援助があるだろう。

これに対し吐酔は、自分は仏教徒であり、弥陀の本願に帰順している身であるので、キリスト教徒から金を受ける気はない。まして学費欲しさにキリスト教の布教につとめるなどと、偽りの約束はできないといって、グリフィスの提案を断わった。

吐酔はその後しばらくは、さまざまなアル

バイトをし、グリフィスからも多少の補助を受けて生計を繋ぎ、後日西本願寺の海外留学生として給費を受けるようになった。

そこで問題の第二の点は、親密な二人の間にこのようなトラブルが生じた原因は何であるかということである。それは双方の理解不足にあったと思われる。

まずグリフィス側の誤解から述べる。すでに記したように、吐酔は一八七一年（明治四年）四月に十五歳で明新館に入学し、グリフィスの授業をうけていた。吐酔は僧衣を着て登校していたことと、聡明な美少年であったことにより、グリフィスの注意を引いた。彼は吐酔に僧衣を脱いでグリフィスの家に同居するように勧めた。

説得の効果があり、その年の十月十三日の日記にグリフィスは「吐酔が僧職をやめて、わたしといっしょに暮らすことになる」と書いている。そして十月十九日の日記には「きょう吐酔がわたしといっしょに暮らすために来た」とある。

グリフィスは吐酔が同居するようになった数日後（十月二十八日）に、姉に手紙を書いて次のように報告している。

「吐酔はわずか十五歳であるが、目立って利口な若者で、少女のようにやさしく、ダイヤモンドのように才気が輝き、容姿は端麗である。

彼は仏僧であった。仏僧をやめよというわたしの懇請に対し、長い間拒否的な答えをしていたが、ついに彼は、着ていた金色の刺繍がしてある輪げさと黒染めの衣とを脱ぎ捨てて、今は仏僧であることを廃している。」

つまり彼は、一人の若い仏僧を改宗させることに成功したものと思い込み、喜んで姉に報告しているのである。

日曜日の朝、グリフィスは同居している助手や少年たちとともに聖書のマタイ伝を読んでいた。それも英語の聖書ではなく、日本語訳の聖書であったらしいから、英語の勉強のためではなく、純粋に日曜日の朝の宗教的な勤めであった。

吐酔ももちろんこの朝礼に参加していた。だからグリフィスが、吐酔が仏教を捨ててキリスト教に改宗したと勘違いしたのは当然である。ここにグリフィスの根本的な誤解があった。

それに対し吐酔の側にも軽率で無知な点があった。彼は十五歳の少年にすぎなかったとはいえ、当時はまだキリシタン禁制の高札が福井の九十九橋のたもとに立っていることを僧職である彼が知らないはずがなかった。

それにもかかわらず、僧服を脱いでグリフィスの家に同居し、日曜ごとにいっしょに聖書を読んでいたことは、少年だからといって軽く見過ごすわけにはいかないであろう。後日、自分は「弥陀の本願に帰順している身である」からキリスト教徒にならないと宣言するくらいなら、思わせぶりな言行をもってグリフィスに近付くべきでなかったであろう。

吐酔が、学費の確実な保証がないアメリカ留学に応じたことにも、かなりの軽率さが感じられる。グリフィスがなぜ学費の完全な保証をしないのか、彼の来日の目的は何であったのか、彼が吐酔をアメリカへ連れて行こうとする目的は何であるか、これらのことについて吐酔は深く考えていなかったようである。

まず学費について述べれば、グリフィスが

日本にいる間は開成学校の教師としての収入があったので、書生の一人ぐらいは置いておけた。しかしグリフィスの意図では、アメリカへ帰国後は定職には就かず、彼の著書『皇国』の執筆に専念して、筆一本での暮らしをするつもりであったから、文筆料と講演料だけでは吐酔の留学費を負担するに十分な収入を期待することはできなかった。

だからこそ、場合によっては吐酔を日本に送り返すという条件付きの契約になったのである。だが吐酔はこの契約条件の重要な意味を理解できず、この条件がいざ発効となったとき、グリフィスに逆恨みをしているのである。

次にグリフィスの来日の目的は、彼がエリンとの結婚をあきらめて日本行きを決意したとき、姉に送った一八七〇年（明治七年）九月二十六日付けの手紙に明瞭に述べてある。

「わたしは教会と福音のために最高のことをするという考えのもとに［日本へ］行きます。わたしの人生は教会と福音にささげられています。わたしはそこに神のお召しを感じます。わたしの人生のもっとも重要な目的は福音を伝導することであります。これをわたしは間接的に行ない、福音を迎える用意をその国［日本］にさせる手助けをします。」

この決意を読むと、先に引用した日下部太郎の大望を思出す。われわれはグリフィスの晩年の写真を見慣れているので、彼に対して老熟した紳士というイメージを抱きがちであるが、彼は日下部より二歳しか上でなく、学園では一学年だけの先輩に過ぎなかった。だから明治初期には二人とも二十歳代の若者であった。

両人とも青年の純真さと誠実さを有していて、一人はアメリカ留学にあたり経国の大望を宣言し、一人は日本赴任にのぞみ福音伝道の大志を陳述している。しかもグリフィスの場合、宗教的使命のみを強調していて、福井藩が彼に課していた任務、すなわち藩の子弟に理化学を教授するという使命については片言も触れていない。

当時日本ではキリスト教は禁制であったから、公然と福音を伝道することは許されなかった。そこでグリフィスは、見込みのある少年吐酔を説得して仏教の僧職を捨てさせ、自分の家に同居させ、日曜日ごとに聖書の講読を共にした。これをもってグリフィスが、非公式な伝道が成功したと思ったのは当然であった。

したがってグリフィスは、この改宗した少年をアメリカに連れて行き、教会関係者から吐酔の学費を援助してもらい、一人前の信徒に育て上げて日本へ帰らせようと思ったのであろう。

ところがそれは彼の思惑違いであって、吐酔はキリスト教徒になることをきっぱりと拒絶した。吐酔はグリフィスの期待を裏切ったのである。

グリフィスが吐酔をアメリカに同行したもう一つの目的は、『皇国』の執筆にあたり日本の歴史についていろいろな助言を吐酔から得ることであった。このことは仲が不和になってからも続いていたようである。

吐酔の留学に関する第三の問題点は、彼はいったい何を学ぶために留学したのであろうかということである。彼は専攻する学問について確固たる勉学目標をもっていなかったのではなかろうか。

彼はペンシルバニア大学の科学学校で理化

学を修めた。しかるに山下英一氏によれば、吐酔は、科学学校を卒業したらイギリスへ行き、有名な仏教学者マックス・シェラーのもとで南伝仏教を学ぶつもりであったが、学費のつごうがつかず、実現しなかったという。もしこれが事実ならば、彼の学問的関心は科学学校在学中からすでに理化学を離れていたことになる。

日本へ帰って後の彼の経歴は、先に述べた通りである。京都府中学校に八年間勤めていたが、突然校長の職を辞して、外務省や裁判所の書記に転じた。彼が大学で修めた専門的知識とは係わりのない全く別の世界へ進んだのである。

さらに彼は、彼がいっしょに学んだ科学学校の同窓生とも、ことさらに連絡を断っていた。ペンシルバニア大学の一八七九年卒業生は、一八九九年に卒業二〇周年記念の雑誌を出版することにして、吐酔にも近況を知らせるように要請した。だが彼はそれに答えようとはしなかった。

しかし学友から重ねて督促があったので、彼は簡単な履歴書を書いて現況を知らせるとともに、「昔のクラスのことにすっかり関心を失っている理由をここで述べるとはできない」といっている。つまり彼は母校の同窓生とも自ら疎遠にしているのである。

これらの事情から察するに、吐酔は科学学校卒業後、学校で専攻した理化学への興味をなくしてしまっただけでなく、共に学んだ同窓生への関心まで失い、学問へも学友へも故意に絶縁していたようである。

そうであるとすれば、彼のアメリカ留学は彼の人生にとって、必ずしも有意義であったとは思えない。吐酔の留学は、日下部太郎とは異なった理由により、やはり失敗であったといってよい。

**注**

1　若き日のグリフィスおよび日本からの招きについては、次の書による。

An American Teacher in Early Meiji Japan by Edward R.Beauchamp 1976

エリンについてはグリフィス自身の、一八七〇年九月二十六日の手紙をも参照した。

2　今立吐酔の経歴については次の諸資料による。

(a)吐酔の手紙（一八九八年九月十七日）彼の履歴が書いてある。グリフィス文庫所蔵

(b)グリフィスの手紙および日記　日付けは本文中に記してある。

(c)『京一中洛北高校百年史』昭和四十九年　この書については京都大学藤井譲治先生の教示による。吐酔の写真はこの書より転載

(d)山下英一氏の次の著書および論文

『グリフィスと福井』福井県郷土誌懇談会昭和五十四年

「今立吐酔とグリフィス」『若越郷土研究』三四の二　平成元年三月